

京都女子大学図書館「方丈記コレクション」

—— 概要と『方丈記宜春抄』新出写本紹介 ——

中 前 正 志

この程、京都女子大学図書館に「方丈記コレクション」が設置された。「方丈記とその注釈書の近世写本・版本」計三十八点から成っている。いずれも新たに収蔵されたものでなく、三十年以上前から所蔵されていたのを整理した結果、本学図書館七番目のコレクションとして一括されることとなったものである。

三十八点いずれも近世のものだが、そのうち十九点が『方丈記』の写本で、四点が同書の版本。合わせて二十三点①～③の一覧は、中前編『東山中世文学論纂』（私家版、平26）に掲載している。写本十九点には、新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』に翻刻が収載されながら、その後所在不明となっていた、略本（長亨本）である吉澤本②のほか、青木怜子編『広本略本方丈記総索引』に言及されているものや、はり所在不明となっていた元和三年写本①や、もう一つの名古屋本とも言うべき慶安五年写本②、慶長三年幽齋校合本の江戸前期転写本③、「于時元亨」という本奥書を有し、「不時に阿弥陀仏両三反申て止め」など特異な本文が目につく江戸中期頃の写本④、松花堂昭乗の高弟で能

筆家の藤田友閑の真筆本⑤、形態面で注目される卷子装袖珍写本⑭、「聴雨大人」林蓮阿校正本の元治元年転写本⑳、などを含む。これらについては順次検討中で、その結果は、右『東山中世文学論纂』のほか本誌『女子大國文』、『国文論藻』において報告している。版本四点はいずれも正保版本であるが、その中には、他にはあまり見かけない松会版（山門真如藏旧蔵書）⑫も見られる。

右以外の十五点⑳～㉓は、『方丈記』の近世注釈書である。⑳㉓が写本、他は板本。以下に、注釈書ごとに分けて一覧にしておく。請求記号〈資料ID〉、刊記の一部〈書肆名〉あるいは書写時期、装丁・冊数、寸法、外題、内題、*その他、の順に列記した。

a 『鴨長明方丈記之抄』

- ⑳ 914.42/A6 〈0085105120〉 「明暦四_{戊戌}正月吉日」〈長谷川市良兵衛〉 袋綴（朝鮮綴） 一冊 26.0cm × 17.6cm
外題「首／書」鴨長明方丈記_全 内題「鴨長明方丈記之抄」 *題簽に朱印「加持井御文庫」。
- ㉑ 914.42/A6 〈0085105333〉 「明暦四_{戊戌}正月吉日」〈長谷川市良兵衛〉 袋綴（朝鮮綴） 一冊 26.7cm × 17.9cm
外題「□／□」鴨長明方丈記_全 内題「鴨長明方丈記之抄」
- ㉒ 914.42/A6 〈0085105139〉 「明暦四_{戊戌}正月吉日」〈長谷川市良兵衛〉 袋綴一冊 26.0cm × 18.2cm 外題「頭／書」鴨長明方丈記」（刷り題簽） 内題「鴨長明方丈記之抄」 *錯簡あり（冒頭にあるべき序に相当する三丁分を、刊記掲載丁のあとの最末尾に綴じる）。
- ㉓ 914.42/A6 〈0085105171〉 無刊記 袋綴一冊 17.5cm × 11.3cm 外題「頭／書」鴨長明方丈記」（刷り題簽） 内題「鴨長明方丈記抄」 *未だ「蔵版目録」（山崎金兵衛）あり。
- ㉔ 914.42/A6 〈0085105309〉 無刊記 袋綴一冊 15.8cm × 11.1cm 外題ナシ 内題「鴨長明方丈記抄」

b 『方丈記訓説』

㉔ 914.42/A6 〈0085105180〉「明曆四年^{戊戌}正月上旬」〈大和田九左衛門〉袋綴（朝鮮綴）一冊 27.8cm × 20.0cm 外題「方丈記訓説」上（刷り題簽）内題ナシ *もとと上下二冊を一冊に合綴。

㉕ 914.42/A6 〈0085105279・0085105287〉「延宝三^{乙卯}曆孟夏下旬」〈錢屋儀兵衛〉袋綴二冊 27.2cm × 19.5cm 外題「長／明」方丈記訓説^{上(下)}（刷り題簽）内題ナシ *所蔵印「宝玲文庫」「内山家本」「渡邊千秋蔵書」など。第二冊後表紙見返しに宝曆十一年時墨書。

c 『方丈記諺解』

㉖ 914.42/A6 〈0085105198・0085105201・0085105210〉「元禄七^{甲戌}曆仲春上旬」〈書林平兵衛・書肆清兵衛〉袋綴三冊 26.2cm × 17.6cm 外題「賀茂／長明」方丈記諺解上（中・下）（刷り題簽）内題「鴨長明」方丈記諺解卷世間」（第一冊）「鴨長明方丈記諺解卷出世」（第三冊） *各冊前表紙右上に朱長方印「早田文庫」。

㉗ 914.41/Se93/1~3 〈0000033367・6210001297・6210001300〉「元禄七^{甲戌}曆仲春上旬」〈書林平兵衛・書肆清兵衛〉袋綴三冊 26.0cm × 18.7cm 外題「賀茂／長明」方丈記諺解上（中・下）（刷り題簽）内題「鴨長明方丈記諺解卷世間」（第一冊）「鴨長明方丈記諺解卷出世」（第三冊） *第一・二冊前表紙に青色長方印「K.G.C.」。

㉘ 914.42/A6 〈0085105228・0085105236・0085105244〉刊記「元禄七^{甲戌}曆仲春上旬」の左下に「松会開板」袋綴三冊 22.4cm × 16.0cm 外題「賀茂／長明」方丈記諺解上（中・下）（刷り題簽）内題「鴨長明」方丈記諺解卷出世」（第三冊） *第一冊の冒頭部を欠いており、「鴨御祖社系図」を前表紙見返しに貼付、そのあとに「鴨」「長明」「方丈」「記」についての解説。

③4 914.42/A6 (0085105104) 江戸後期写(抄写本) 袋綴一冊 24.2cm × 17.0cm 外題「長／明」方丈記」(書き題簽) 内題ナシ *末尾に「鴨長明方丈記諺解出世終」。

d 『方丈記流水抄』

③5 914.42/A6 (0085105317・0085105325) 「享保四年^己仲秋穀旦」〈長谷川市郎兵衛・同正右衛門〉 袋綴二冊 26.2cm × 19.1cm 外題「鴨／長／明」方丈記流水抄^{上(下)}」(刷り題簽) 内題「鴨長明方丈記流水抄」 *各冊冒頭に所蔵印「宝玲文庫」など。第一冊を中、心に朱の書込あり。

③6 914.41/Ma34/1.2 (9700646998・9700647005) 「享保四年^己仲秋穀旦」〈河南四郎右衛門・正右衛門〉 袋綴二冊 26.3cm × 18.7cm 外題「鴨／長／□」方丈記流水□」(刷り題簽、上冊は剥落) 内題ナシ *各冊前表紙右下に朱書「中野正言」。各冊冒頭部に所蔵印「中野正言」(朱長方)「K.G.C」(青長方)など。各冊後表紙見返し右下に墨書「中野久兵衛印」。

③7 914.42/A7 (0085105252・0085105260) 「享保四年^己仲秋穀旦」〈河内屋儀助〉 袋綴二冊 25.7cm × 18.0cm 外題「鴨／長／明」方丈記流水抄^{上(下)}」(刷り題簽) 内題「鴨長明方丈記流水抄」

e 『方丈記宜春抄』

③8 N914.42/N73/1.2 (0083193030・0083193049) 江戸後期写 袋綴二冊 27.2cm × 19.4cm 外題ナシ 内題「長明方丈記抄」

吉澤義則『方丈記諸抄大成』(立命館出版部、昭8) 付載小川壽一^刊「方丈記書史」や築瀬一雄『方丈記諸注集成』(豊島書房、昭44)は、刊行された近世の『方丈記』注釈書として、右のa～dおよび加藤盤斎『長明方丈記抄』の計五点を挙げ、それぞれの各版について解説している。盤斎の『長明方丈記抄』については、両書記載のいずれの版も

右「方丈記コレクション」には含まれていない。その一方で、③の松会版『方丈記諺解』は、上の両書に言及がないようである。

しかし、そのようなことよりも右のリストで取り分け注目されるのは、③の仁木宜春著『方丈記宜春抄』二冊が含まれていることである。京都女子大学図書館のOPACなどには、それが『方丈記宜春抄』の写本であることが明記されているが、広く紹介されたことはないらしく、ほとんど新出のものと言つていいものである。各前表紙見返しに昭和五十八年十月三十日の京都女子大学図書館受入印が捺されており、前後表紙以外、第一冊は全五十一丁、第二冊は全三十九丁。毎半丁十二行。奥書や印記は見られない。江戸後期ごろの写本と覚しい。第一冊は、遊紙なく、第一丁表冒頭に内題「長明方丈記抄」が見え、そのあと、「此方丈記は、鴨長明か晩年の^{六十四歳の}筆作なり」で始まる総説があり、第三丁裏からの「長明系譜」、第五丁裏からの「題号」についての解説などを経て、第七丁第八十行に「ゆく川の……またかくのことし」と『方丈記』本文が掲げられ、そのあと二字下げの形で注釈が施されている。以下、同様の形で注釈が展開する。第二冊は、遊紙一丁を挟んで、『方丈記』の本文「わか身父かたの……いくそはくの春秋をかへぬる」から始まり、注釈し終わったあと末尾には、「追考」を載せる。

『方丈記宜春抄』は、「出典・類似語句用例については、先行の諸注をうけて発展させ、文意・句意・語意等を、全文との関係に留意して解説する態度を示している」（『日本古典文学大辞典』「方丈記宜春抄」（築瀬一雄）などと評されるものだが、そもそも未刊の書であつて、伝本として従来は、加藤惣一「方丈記古抄の特性とその発展——主として仁木宜春著『長明方丈記抄』の註釈史的価値に就いて——」（『国文学攷』第一巻第一輯、昭9）に詳細な検討が加えられた加藤惣一所蔵本、川瀬一馬「仁木宜春自筆稿本『長明方丈記抄』（新註国文学叢書『方丈記』、昭23）にて紹介された筒井久太郎所蔵本、築瀬一雄『方丈記宜春抄』（碧沖洞叢書19、昭37）および築瀬前掲書に解説と翻刻が掲げ

られた前田育徳会尊経閣文庫所蔵本、加えて金沢市立図書館藤本文庫所蔵本の、計四写本しか知られていなかった（加藤惣一所蔵本・筒井久太郎所蔵本は未見）。『国書総目録』や築瀬前掲書もそれら四本を著録するのみであって、その後、それら以外の存在について報告されたのを知らない。そんな状況のなかで、今回、新たに五本目の写本（伝本）が見出されたことになる。そのこと自体、一定の意味を持つに違いない。また、「未刊であるので、影響力という点で他の版本と同一視できない」（島内裕子『方丈記諺解』の注釈態度）『放送大学研究年報』35、平30）という状況に、無論何ら変わりはないけれども、それでも、ここに五本目の写本が見出されたことは、『方丈記宜春抄』が写本を通してわずかながらも流布しようとしていたことを、従来よりは今少しだけ強く窺わせはするだろう。なお、同書の正式書名は「長明方丈記抄」で、盤斎の注釈と同一書名であるので、それと紛れてしまいやすい面がある。ここに紹介している京都女子大学図書館所蔵本がそうであつたように、他にも長らく埋もれてしまっている写本が、相当数存在している可能性も考えられよう。

ただ、京都女子大学図書館所蔵本は、新出のものながら、本文校訂上の意義などはほとんど全く持ち合わせていないようである。同本が、尊経閣文庫本の忠実な臨模本だからである。毎半丁の行数はもちろん、改丁・改行や字配りのあり方、仮名の字母なども、ほとんど完全に一致している（後掲片影参照）。ただし、尊経閣文庫本が冒頭に掲げる序は、省略されたのだろう、京都女子大学図書館本には見られない。

金沢市立図書館藤本文庫本（0968413 国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム）も、確認したところ、同様に尊経閣文庫本の忠実な臨模本であり、その天部や行間に種々の書込を施したものである（後掲片影参照）。同本の奥書に、該書は、もと前田家の所蔵なり。方今石川県勸業博物館なる図書館にあり。甚だ珍書なれば、予、さきに近藤篤之に謄写を依頼したれば、快く書ておこしたり。旁書首書はおのかしとけなく書けかしたるなれと、今更いかに

ともせんかたなし。かきかへまほしきこと多かれと、年いたく老たれば、黙止しつ。

明治三十九年八月十七日八十二歳高橋富之

と見える。「写本を通してわずかながらも流布しようとしていたことを、従来よりは今少しだけ強く窺わせはするだろう」と先に述べたものの、新出の京都女子大学図書館本と、近代の写本ながら金沢市立図書館本が、ともに尊経閣文庫本の臨模本であることは、その流布が尊経閣文庫本を起点としての甚だ限定的なものであったことを窺わせてもいるだろうか。ただ、例えば、冒頭部の総説に掲げられた長明の「おもひ余り」歌の集付が、尊経閣文庫本「千載恋五」に対して、京都女子大学図書館本と金沢市立図書館本では共通して「千載集」となっていたりもするので、精査し得てはいないが、後二者がそれぞれに尊経閣文庫本を直接の親本としていたのではなく、また、後二者間の直接関係も考え難く、それらとは別の同様の写本の介在が想定されるところかもしれない。

なお、「方丈記コレクション」として一括された三十八点のうち、⑤⑭⑳㉒㉓㉔を除く三十三点は、他の近代の『方丈記』関係書とともに、昭和六十年に臨川書店から購入されている。①や㉑が故若林正治氏の旧蔵書であること明らかなので、三十三点いずれも同氏旧蔵書であろうか。

〔付記〕

小稿を成すにあたり、公益財団法人前田育徳会、金沢市立図書館、京都女子大学図書館より格別の御高配を賜りました。記して深謝申し上げます。なお、所蔵者の許可なく画像を複製することを禁止します。

また、京都女子大学図書館所蔵貴重書を取り上げての学内における展覧をともに担当させて頂くこともあった、故山崎ゆみ教授のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

(本学教授)

是れあししすうと無常をうらむひ出るるまよひもつらきもの
をふみとちうそあはれは病おちてものこころはあはれといへども
まかせぬあはれは志をみてあまがきえすきえすといへどもあ
るはまのこゝろ

是まで一版とす 玉き 禁中玉き乃名と玉

の碁とといふおぼし玉のよきともいふ玉と、次碁藤城す詞く

いづり 釋名云屋號曰覺 説文云屋棟と 昔阿しおハ

まうせなや やきをの折成なる人多うにこれいふ

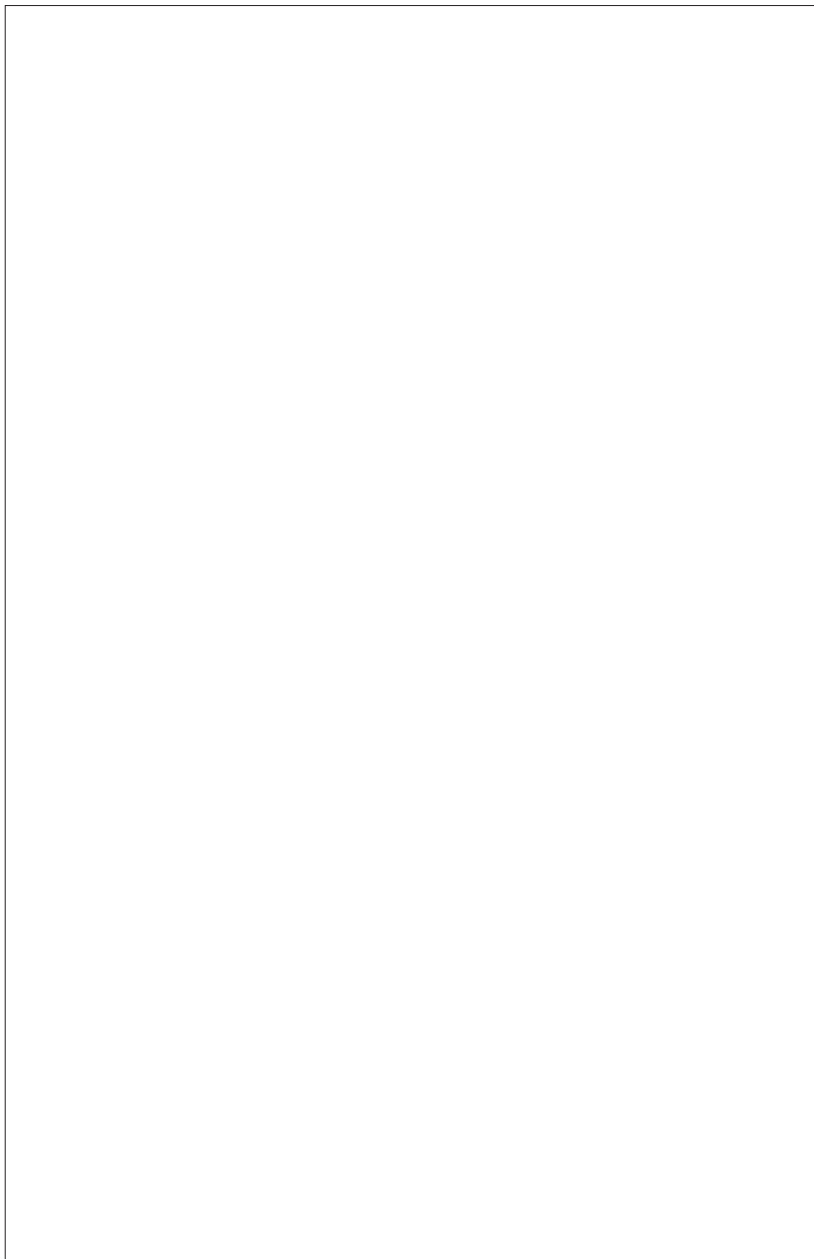
あつむるこれいふに他はあはれ人のすまゝも

もとの入あそまれよてうつかりはよりなり白氏文集

不高山路方感といふ題も萬里路長在六年今始帰所

誼多旧館大半主人非といふは筆管すまゝなり 堀河院初を

前田育徳会尊経閣文庫所蔵本 第1冊・11ウ



金沢市立図書館藤本文庫所蔵本 11 ウ